

ワーカーズコープの自立支援

このまちで 歩んでいく



地域で実践する
生活困窮者、子ども・若者、生活保護受給者支援

資料

夢を描き続けられる
場所には……

生活保護受給世帯の中学生の学習支援

生活環境は、中学生にとって、大きな影響を与えるものだ。学習支援を行っている中でそれが見えてくる。

それぞれ置かれた環境はさまざまであるが、自分の気持ちを表現する場所、受け止めてくれる場所が見つければ、前を見ることが出来るかもしれない。学習支援は単に高校進学を目的としたものではない。夢を描き続けられる場所にならなければならない。彼らは成長し、いつかは巣立っていく。その日が来るまで、共に学び・共に成長していきたい。

「3年間ぐらい過ごした気が」

現在公立高校に通うAくんは、昨年学習支援の学習会に参加していた。獣医師になりたいという、将来の夢を明確に持っていた。夢を実現させるためには、大学進学が必要。学力的に厳しく、彼は希望する科を受験したが、合格することはできなかった。

中学時代、彼は支援学級に在籍していた。発達障がいがあり、こだわりが強い。学習会で趣味やこれまでの経験など、何気ない会話を繰り返す中で、彼とつながることができた。

ボランティアの学生との会話の中で、親族がみかん農家だという話が出て、Aくんは農業に興味を持てたようだ。最終的に農業科に転科したが、前向きに、現在も高校に通っている。

進学が決まり、学習会最後の日、彼は「実際

は半年だったけど、3年間ぐらい過ごした気がする」と言って驚いていた。

高校で寮生活を始めた彼が、つい先日、学校で作った野菜を事務所に持ってきてくれた。今でも彼は頻繁に連絡をくれる。週末は一緒に過ごすこともある。学習会に顔を出し、ボランティアの学生と再会した。その学生は、A君と社会についての話ができたことを喜び、教員になる意欲を再び燃やしている。

進学先で出会った先生や周りで支えてくれる方々のおかげで、彼は成長している。

居場所にならない家庭

うまくいかない現実もある。不安定な家庭の状況があり、幼いころは養護施設で育った。親が保護受給を開始した後に、再び家族と同じ屋根の下で過ごすことになったCさん。将来の夢を描き、希望通りの私立高校へ進学したが、現在不登校となっている。出席日数が足りなくなり、留年する可能性が出てきた。

学校に行けなくなった原因は、学校生活だけではないようだ。今まで別に生活していたきょうだいが施設を追い出され、同じ屋根の下で過ごすことになった。平穏に思っていた家庭環境が変わった。きょうだいが学校で、自分たちの置かれていた状況を周りに言いまわっている。非行などもあり、学校側も対応に困り、登校してほしくないという。せめて学習会に参加してくれればと思い、呼び掛けるが、なかなか連絡も取れなかった。家庭が、気持ちの安らぐ場所になっていない。

(ワーカーズコープ 熊本市、山下潤)

間違っ
ても
大丈夫

10代女性の学び直し支援

「学び直し支援」（就労に向けた若者の学習サポート）を担当する私がYさん（10代女性）に出会ったのは、5月の初めのことだった。

Yさんは去年お母さんを亡くし、お父さんと2人暮らし。小学生の時にいじめにあい、中学校では不登校に。通信制高校卒業後、父親以外の人との接触がほとんどなかった。初めて会った時は、俯き加減で前髪が長く、マスクをしていて表情が見えづらく、人と接するのが苦手なかなという印象。以前就職したが、職場に馴染めず体力的にも厳しかったため退職しているということだった。

「間違っただけですいません」

Yさんは自分で危険物乙四の試験を受けること決め、今後の学習スケジュールを立てて持ってきてくれた。

その次の日から約3カ月、週2回2～3時間ずつ学習教室に通ってきた。1日は自主学習、もう1日は振り返りテストの日と決めた。声を出すことやコミュニケーションに慣れるよう、テストは口述式にした。

試験に受かることはもちろん大切だったが、それと同じくらい私が大切にしたいのは、人と話すことは楽しいんだと実感してもらうこと。

初めの頃は、学習中も緊張気味で、解らない問題があっても、自分一人で何とかしなくては、という感じがあった。振り返りテストに

ついても同様に、解らない・答えられない＝自分ができない人だという思いが彼女の中に強くあり、「間違っただけですいません」と謝ることもあった。その都度「謝らなくていいんだよ」「解らないことを見つけるためのテストだから、本番の試験で解答できれば大丈夫だよ」「この前できなかった問題できたね」と。目標点数が達成できた時にはハイタッチをした。

ボランティア、就職活動へ

私は年齢も近いので、Yさんには何でも話せるお姉さんの存在に感じてもらえるよう、空いた時間にYさんの好きな塗り絵や折り紙を一緒にして、会話の機会を増やしていった。

もともと静かなYさんだが、1カ月を過ぎたあたりから少しずつ自分から質問したり、学習以外での会話ができるようになった。何より嬉しかったのは、笑顔を見せてくれるようになったこと。

Yさんは本が好きで、図書館でボランティアをするプログラムにも参加するようになった。

その頃からYさんは、必ずつけていたマスクを外し、長かった前髪も切り、目を見て話せるようになっていた。

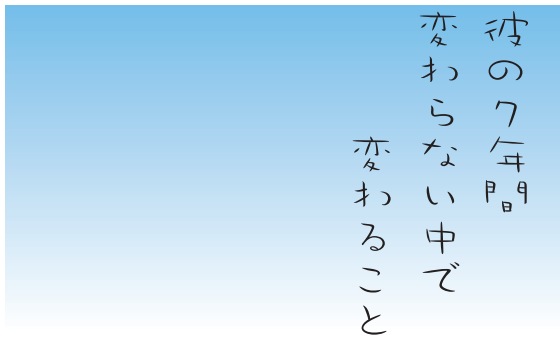
Yさんは毎日自宅でも学習しており、試験は見事に合格。図書館ボランティアも最初のうちは私が同行していたが、今では一人で参加し、図書館職員とも会話を交わせるまでになった。

そして就職活動を始めることになるが、最初、「本当は今、暮らすことに困ってないし働きたくないです」と本音を話してくれた。

その数日後、「父だけ働いて、私がのうのうと生活しているのは悪いなと思って。働きたくないって言うてすいません……ウフフ」と悩みながらも、自分で気づいたことを笑いながら伝えてくれた。

この半年で、Yさんはいろいろなことにチャレンジし、できることを増やした。働くことに関して、まだ悩みや不安はあるようだが、少しずつ前に進んでいる。

（ワーカーズコープ 釧路市、清水麻乃）



10代後半～20代の男性
7年目で仕事に

7年前の事業所開始年度に登録した時、10代後半だった彼は、いわゆる「ひきこもり」状態だった。

視線を合わさず、自分からはしゃべらず、相談やプログラムの参加時にもモチベーションの波が。うまくできず、失敗してしまいそうな場面では途中で投げ出したり、気分を損ねて帰ってしまうこともあった。

本人に継続の意思を確認した。でも、プログラムに参加しても、「ただ来ているだけ」の様子は変わらなかった。

スタッフは“何とか意識啓発ができないか”と、時に厳しく接しつつ、プログラムの中で彼の興味のある話題を出したり、セミナーを実施している時間に面談を設定し、自然に見学ができるようにと工夫をした。

傍目^{はため}には大きな変化が見られないまま1年、2年……と経過していった。

その間、周りの利用者が進路を決めて巣立っていった。そのたびに、彼はいらだちや寂しさを感じているようだった。

私たちスタッフは、ただ、諦めるでもなく、怒るでもなく、そんな彼に辛抱強く向き合ってきた。

“変わらず”は停滞しているということなのか？ スタッフは、もっと自分たちにできることはないかと自問自答を繰り返しながら、“変わらず”彼と一緒に考え、一緒に立ち止まり、歩んだ。

私たちが“変わらず”に接したことは、安心

につながったのかもしれない。

見つけた彼の格好よさ

12年の夏頃、長い間一緒にいた利用者の多くが進路を決めた時期、彼は少しずつ変わり始めた。いや、もともと持っていた自分の力を信じて、発揮できるようになっただけかもしれない。

スタッフに笑顔を見せることが増えた。私たちとの関わりを積極的に楽しむようになった。

プログラムでは相変わらず気分屋な姿を見せていたが、それでも最後には泣きながらもやり遂げることが増えてきた。

一生懸命にしている姿をほかの利用者に見せたがらなかった、格好つけてばかりの彼。その彼が、農作業と除草のジョブトレーニングに初めて参加し、泥だらけになりながらもやり遂げた。

そして彼はこの春から、専業農家の従業員として働いている。

相変わらず気分屋で格好つけたがる彼だが、仕事終わりに汗と泥にまみれた作業着で事業所に遊びに来てくれる姿は、今まで見たどんな彼よりも格好よく、私たちの目には映っている。

(ワーカーズコープ 宮城県大崎市、田山順也)

本人の力を信じて

24 歳男性 ホームセンターで職場体験

Mさん（男性）24 歳。17 歳の時、軽度の発達障害と診断を受けた彼は、高校を卒業後、飲食店やスーパーのレジ、警備の仕事などに挑戦したが、3 日～2 週間で辞めてしまっていた。警備の仕事だけは 3 カ月ほど継続することができたが、同僚のキツイ口調に耐えられず、辞めていた。

「受け止めて返す」

来た当初は、すぐに仕事へ向かうというより、「自立したい」「就職につながるサポートがほしい」「自信を持ちたい」という希望から、相談やセミナーを実施してきた。

しかし、計画がプレッシャーになり、とても苦痛を感じるようだった。職場見学や体験のために先方とも調整をして、いざ参加という段になると、一緒に決めた計画なのに、ドタキャンするというパターンだった。

そんな彼に対して、支援する立場としては、「期待しても期待しすぎず」と、心の中で葛藤をもちながら関わってきた。

Mさんは、家庭内では親との葛藤を抱えていた。Mさんが家族に対する不満や愚痴を吐き出すときに、親の気持ちも理解するよう、こう考えたら？ と助言しようとするが、それに対しては拒否する態度。こちらは黙って聞くしかないのだろうか、関わり方に悩む日々だった。

Mさんは臨床心理士のカウンセリングを受

けていたので、心理士の先生に関わり方の相談をした。

「彼の話をストックリーとして流れのまま受け止め、その内容を整理して、確認するように返してみても」と助言を受け、実行に移した。すると、話をわかっているということが伝わったようで、「受け止めて返す」ことの繰り返しから互いの関係がしっくりいくのを感じた。

信頼関係ができてくると、やり取りの中で、Mさんの家族に対する見方も、少しずつ理解の方向へ変わった。

障害をオープンに

1 日 3 時間という短時間ではあるが、ホームセンターの品出しの仕事を職場体験として行うことに。

あらかじめ本人も含めて受け入れ先と相談し、期間は設定せず、1、2 回やってみて、できそうと思ったら、そのたびに期間を延ばしてもらうようにした。

最初の月は、辞めるかどうしようかと悩んだときも多かったが、1 週間、さらにその先、と続けていった。2 カ月目に入り、職場の人に強く当たられたと本人が感じたときには、自己紹介文を書き、障害をオープンにし、苦手な部分を伝えた。

過去の職歴は最高 3 カ月。今回初めて 4 カ月も継続できたことが、本人にとって大きな自信となった。

家族と離れて暮らした方が本人も安定し、自立につながるという主治医のアドバイスもあり、次のステップとして、現在、一人暮らしのアパートを借りようとしている。

保証人のお願いや不動産への問い合わせを Mさん自身でやるようになり、その姿に驚かされた。

こちらが本人の希望や訴えに即対応するより、一歩踏みとどまって、自力でできるか検討してみることの大切さを痛感させられた。本人の力を信じてぐっと我慢！ Mさんとの関わりで多くの学びを得た。

（ワーカーズコープ 名護市、玉元悦子）

受け入れられたいから
力を出せるのは
から

29 歳女性、27 歳男性
高齢者福祉の現場からステップアップ

2012 年 8 月、障害者就業・生活支援センターから一本の電話があった。「清掃の短時間パートの依頼があったのですが、やってみたい人はいませんか？」

仕事の場所は、株式会社が運営する市内のデイサービス。仕事の内容は、デイサービスの利用者が帰られた後の清掃業務（午後 4～6 時）だった。

業務は清掃でも、高齢者福祉の現場に入ることができるので、福祉の仕事に興味があったり、短時間の仕事から始めることが合いそうなメンバーを選んだ。すぐに 1 週間のジョブトレーニングに入り、その後 3 人がパートタイムで雇用された。その際のローテーション表は若者と相談しながら作っている。

「こんなに丁寧に指導を…」

学生時代から、職場でも人間関係に困難を抱えていた A さん（29 歳・女性）。初日のジョブトレーニングでは「こんなに丁寧に指導を受けたことがありませんでした。こんな職場もあるんだなと思い嬉しくなりました」と感想を述べていた。業務に慣れるまでは、デイサービスの職員が手伝ってくれた。

最初は週 2 日だったが、もっと働きたいと、12 月には週 5 日の勤務をこなすようになった。短時間でも、パートになると扱いはほかの職員と同じで、同様の契約書も交わす。忘年会に誘ってもらえるなど、一緒に働く仲間とし

て受け入れられた実感があったようだ。

デイサービスの職員のアドバイスもあり、3 月にはその会社が主催するヘルパー講座を受けて資格も取得。働くことに自信を持った A さんは、福祉の仕事ではないが、就職にチャレンジして採用された。

ステップアップできる場

専門学校卒業後、就職しないまま時間が経ち、「何をしたらいいかわからない」と 2 年前に相談に来た B さん（27 歳・男性）。いくつかのジョブトレーニングは経験したものの、そこから先、就職に結びつかなかった。

行動に移すことや言葉を口に出すことに時間がかかり、そのことを本人も自覚はしているものの、なかなか思うように行動できずにいた。

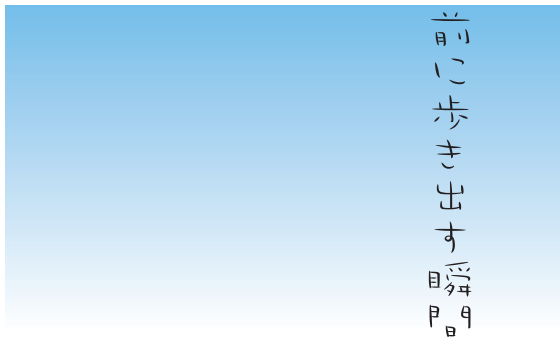
仕事はまじめで丁寧だが、2 時間で終わらないなど改善すべき点もあった。しかし、ジョブトレーニングからパート雇用となり、新しく体験する人の指導をお願いすると、自ら事業所まで迎えに来てくれる心遣いを示し、嬉しい成長がうかがえた。

職場では、時間内に仕事を終わらせることができるようになり、「丁寧な仕事をしてもらっています」と好評価を頂いた。

昨年 9 月から 1 年。6 人が雇用され、そのうち 3 人がほかの仕事へと巣立った。企業としてはせっかく慣れたのに、また人が変わるといふ悪循環なのだが、1 日 2 時間の短時間の仕事から始められ、ステップアップする人は温かく送り出してもらえる環境に感謝している。

収入を得るということ、職場で受け入れられることが就労意欲につながることを、この就労体験の様子から実感した。今後も地域の中で協力企業を増やしていきたい。

（ささえあいコミュニティ生活協同組合新潟
三条市、佐藤道代）



27 歳男性
高齢者福祉の現場からステップアップ

「働くこと」を体験する場の1つに、上落合地域交流館（東京高齢協が指定管理者として運営）での清掃のジョブトレーニングがある。週6日間、シフトを組んで全館の清掃を行う。

無口で物静かな彼が…

母親同伴で相談に来たAさん（中高校生不登校気味で大学卒業後ひきこもりの27歳男性）は、うなずきと首を横に振るという意思表示しかできず、ようやく質問に言葉で答えられたのは、来所から数カ月経った頃。人間関係は苦手だが働きたい！ と思いは強く、清掃のジョブトレを体験してもらった。

数カ月後、「学び直し講座」（パソコン講座、ワークショップ、ボランティア、農業体験。ワーカーズが実施する東京都若者参加応援事業。2カ月間）に参加。最初は緊張で朝食ものどを通らず、眠れないことも。毎日出席しなければ、という思いに苦しんでおり、「休んでいいんだよ」と声をかけ、親も含めて周りは本人が乗り越えるのを見守った。2回休んだが、その後は順調に。目標としていた卒業ができた。

その後ジョブトレに復帰した彼の変化はスタッフ全員の目に見えるくらい大きなものだった。

新しく参加する利用者の教育係をお願いした頃から、無口でもの静かな彼が、声を出してあいさつし、笑い、スタッフに用があれば自分

から話しかけることもあった。

2年目の4月からは夜間の専門学校に通い始めた。6月に簿記3級を取り、週末にはビル清掃の会社でアルバイト。現在は簿記2級試験に向けてがんばっている。その先は、自分で可能性を切り拓いていこう。

（ワーカーズコープ 新宿区、榎山清子）

「酒を注いだのは
今日が初めて」

20代後半男性 ボランティア活動に

3年前、Aさん（男性、20代後半）は、ハローワークで就労のための準備が必要だと言われて来所した。最初はとても緊張していた様子を覚えている。

診断名は…？

Aさんが体に不調を感じたのは8年前。突然倒れ、気づいたら病院のベッドの上だった。診断名は統合失調症。その日から懸命に治療に専念してきた。しかしある日、薬を止め、その直後から体調がよくなった。いまだによくわからないが、統合失調症ではなかったようだ。

別の病院に通い、どうやら発達障がいがあることがわった。心理検査の結果はIQが高く120程度。障害者手帳を取得して障がい者枠での就労を考えているようだった。

叱られたり、説教されたり

支援に慣れてきたある日、体験プログラムの一環で児童館の育成会と連携して地域のお祭りに出店した。たこ焼きの販売だ。3人でバック詰め、盛り付け、接客を分担した。カバーし合いながらあっという間に5時間が経過。

充実感を得て、終了後の懇親会にも参加した。酒を飲みながらおじさんたちに「声が小さくて聞こえない」と叱られたり、説教されたり

しながらも楽しんでいる様子だった。

Aさんが懇親会の最後に言った言葉が忘れられない。「自分以外の人に、酒を注いだのは今日が初めてです」と。

今回のプログラムを通じて、Aさんは人に感謝したり、されたりした。人の役に立てて認められ、人と協力して出来るという手応えを感じた。

Aさんを見て思った。働くことの喜びや人の居場所というものは、誰かと一緒に取り組むことがあり、他者に貢献して役立ち感を味わえる、そんな関係性の中に存在するのではないかと。

来所して6カ月目のこと。Aさんは自信を取り戻し、次の行動へと踏み出す。

他の若者支援団体の合宿型プログラム（6カ月）に参加することを決めた。東北大震災で被害を受けた宮城県石巻市いしのまきでのボランティアで、現地の人の話を聞いたり、移動販売をしたりしていたらしい。さらに6カ月延長して、ボランティアを続けていた。

久しぶりに電話で話した時、声が大きくなっているのが印象的だった。

（ワーカーズコープ 世田谷区、篠原健太郎）